

天安 紀上110⁺

強弓 732⁺ 矢音 矢か飛んてゆく音
軍管 665⁺ 陣内 級15⁺

2,327⁺

かびと 446⁺ 金 2293⁺

木弓 魏太後44⁺

敵。味方入り乱れての混戦。
戦いは、矢戦から始まった。
田心姫の兵達は、下加短く上加長い木弓を
キリキリと引き絞って一斉に矢を放った。
弧を描いて飛んでゆく矢は、素戔鳴尊の陣
の大地にひびきなり雨・霰と降り注ぎ、
あるいは兵達が手にしてゐる楯にバシツと隙
突き刺さった。
またさらに、力一杯投げつけられる石飛礫が素戔
鳴尊の兵らの兜や鎧などに当たってあたりを
飛び散った。
素戔鳴尊は、思わず叫んだ。
「えい小癪な。今度はこちらからお見舞い
だ。それ、やれー」
強弓から放たれる矢は、鋭い矢音をたてな
から、田心姫の陣営めかけて飛んでいった。
こうして、ヒューヒューと飛び交う石や矢
は、天安河の上空をよぎって互いの陣内に降
り頻った。
もつとも、数でこそ素戔鳴尊の兵卒達を遥
かに圧倒してゐるものの、如何いわけは鳥合の

あ 2325 1459

言たて 娘24⁺

ねろ 村 1731 鳥 182
ねろ 村 1731 鳥 182
ねろ 村 1731 鳥 182

衆に等しい田心姫兵達は、唸るような物音を羽音をたて、狙い澄ましたように飛来する矢の威力に肝を潰し、攻め倦ぬ、いつしか遠方から「ワッ、ワッ」と氣勢をあげるばかりになつていた。

「どうしたどうした。口ほどもない臆病虫共め」

だが、素交、鳴陣の軍兵達がちよつとでも油断し、ものなら、間近に矢を射る音が鳴物陰などから石が投げられ、矢が射込まれる。

いかにも、昼・夜となく、絶え間なく繰り返される奇襲攻撃。矢石は、夜毎に寝込みを襲い、睡眠を妨げた。

その容赦ない寄手の者達の健さに、素交、鳴陣の陣内に身を置く者達は、いらいらするばかりに苛まれ続けた。

そして得るところもなく、ただ攻防に明け暮れる数日が打ち過ぎていった。

まるで、兵糧攻めといった感があった。

*

いひびき 1008

1610

手の前 1509 部下 560.11

2.329

はたまた 1792

精兵 1230

はたかろ 1790

ふた天のとげ 2309

うなか 203

何だあいつか

そんなある日、阿蘇外輪山西端の二重峠あたりから様子を窺っていた意美志留の軍が、いよいよ行動を開始した。素多鳴尊の背後からの攻撃を促す烽火の煙があがったのだ。田心姫の陣中から意美志留を複頭とする精兵達は、黒々と一団となつて駆け下りた。土埃をあげながら、一団となつて駆け下りの外郭城南門（羅城門）を目指した。（第12回参照）と響動めく弱手の軍勢の雄詰は、神山阿蘇山の無気味な鳴動か、はたまた崩れ落ちる山津浪の地響きか、と思わればかりの凄じさだった。軍鼓は轟き、軍旗が翻った。見詰めた素多鳴尊配下の武将達は、北からだけでなく、東の方角から疾風怒濤の如く押し寄せ、意美志留の軍勢をも迎え撃つ形になった。猪口才な。

軍団 小井 946P
 紀下405P
 青土める
 村屋 2160P
 林を交ぬお役所
 2330P
 2332P
 金鼓 全鼓の音 2318P
 金鼓 名600' 陣中の号令に用いる
 2318P
 金鼓 1575P
 金鼓 1980P
 金鼓 2331P

彼奴に何程のことが出来ようぞ
 素多鳩雪は、目を怒らせ鬚を震わせて憤
 た。しかし止むなく、ここにその持てる力
 の一部を割き、東の敵に当らせた。
 勢いづいた田心姫の軍が厳
 しい反撃に転じた。
 金鼓の音は、鞆鞆と鳴りわたり、
 頼りなげに見えた兵士達が、何と今までとは
 まるで違っていた。
 猛攻に継ぐ猛攻が続き、
 処々に血飛沫があがった。
 とその時、村屋(村を支配する役所)の守
 (長官)が、都城南門近傍の
 群山の方から慌
 らしくも逃げようようにして駈け込み下
 青ざめた顔でこう報告した。
 「倭国王、素多鳩雪に申し上げます。南の
 分隊は死力を尽して戦っておりすが、しか
 もはや、踏み止まれません。いまにこの都
 の口中の道から敵の軍団がやって来る
 でしよう。それ故、都城の口中の道を防が
 れるかよろいかろうと存じます」

軍勢 次役所

均等
 2314P
 2315P
 2316P
 2317P
 2318P
 2319P
 2320P
 2321P
 2322P
 2323P
 2324P
 2325P
 2326P
 2327P
 2328P
 2329P
 2330P
 2331P
 2332P
 2333P
 2334P
 2335P
 2336P
 2337P
 2338P
 2339P
 2340P
 2341P
 2342P
 2343P
 2344P
 2345P
 2346P
 2347P
 2348P
 2349P
 2350P
 2351P
 2352P
 2353P
 2354P
 2355P
 2356P
 2357P
 2358P
 2359P
 2360P
 2361P
 2362P
 2363P
 2364P
 2365P
 2366P
 2367P
 2368P
 2369P
 2370P
 2371P
 2372P
 2373P
 2374P
 2375P
 2376P
 2377P
 2378P
 2379P
 2380P
 2381P
 2382P
 2383P
 2384P
 2385P
 2386P
 2387P
 2388P
 2389P
 2390P
 2391P
 2392P
 2393P
 2394P
 2395P
 2396P
 2397P
 2398P
 2399P
 2400P

山むなく②2330
標高②2330'59
標高に等しい

2330

2330

2,331' 550.11.11

(1)

合志原のあはる 地学野

というのだった。(天武紀元年七月条参照)
なりて、その報は、問もなく現実のことと
なった。

意美志留の軍勢が、
都城の南門を打ち破り、
中道の宮城めざし、ド
ドドツと押寄せて来た。

後方を突かしては、さすがの
素戔鳴尊は、やむを得ず、
たものでならない。

意を決して兵を引き、宮城内に
籠籠った。
邪馬台国の都城全域を守るには、その都は
途轍もなく大きすぎたし、兵の数はあまりに

も少なすぎたからであつた。
素戔鳴尊は、こうして宮城内に
籠籠ることを、宮城十二門の全七をピタ

リと閉ざし、
籠城するしかなかった。
広大な合志の原の真只中に築造さ

れた宮城は、いねゆる平城であつて、
めるに易く、守るに不利だ
は甚だ

は甚だ

石槍 1238
 龍文 孫生
 の扉

改行

2.332 P

やまの物 洛陽がす たふた 1103 1331 4P
 立ち塞がる 1319P
 高きと 日前に 着え返る 1685P 369 11. 12 回
 熱 1130P 熱 1130P 熱 1130P

素多鳴は怖気付いて宮城の中へ逃げ
 隠れた。あといと押した。かかれ
 田心姫の軍も、そーて意美夫留の軍も、も
 うすっかり勢いに乗ってしまっていた。ワ
 トワと煮え返るような熱気が全軍を覆いつ
 くし、兵士達は高々と立ち塞がる堅固な宮城
 門に向かって体当りで突進していった。
 尚、既に述べたように、宮城の城門の楼は
 みな二層であつたが、ただ一つ、北面西方の
 城門（大夏門に相当する門）のみ、三層の楼
 をもつて雲にも届かんばかりの威容を誇つて
 いたのであつた。（「中国の帝都」村
 田治郎、綜芸舎、七八頁参照）
 楼門上から引き放たれた矢は、宮城門下に群
 がる人々の頭上に降り強いた。一かゝいま
 となつてはもはや、怒濤の如く襲い掛つてくる軍
 兵の力を押し止めることは出来なかつた。
 宮城門を打ち砕く斧鉞の激しい音。きろめ
 く剣や鉾。城壁を越えて飛んでゆく石槍や石

凌(ハ)云 1190⁺ 物のすこ
 洛陽伽藍記 313⁺ 物凄(ハ)云 2198⁺
 又ハカニ云 平家 14⁺ 56. 11. 13 (6)
 1613⁺ 11. 14. 13

コクヨ ケー-20 20×20

わめ 喚く 元 2381
かみせ 喚声 元 496
小林 789
エ 496
エ 496
エ 496

2,334 P

ちや 元 1438
宙 空中
せん 元 867
鮮 血 867

かみせ 元 498
政 然 498
飛 人 元 209
次 209

こうして、ドーツと宮城門内へ雪崩水込んだ
意美夫留の兵達は、宮城の西北の隅に聳える
金堀城の樓觀目掛けて、まっしぐらに突き進
んでいった。
とはいえず、うはさせいと素戔鳴尊の兵達
が行く手を遮り、猛然と意美夫留等に襲いか
かってきた。
斬り結ぶ剣と剣。ハツシと打ち合う銚と銚
激しい揉み合い。金と昇る砂埃。飛び散る鮮
血。断末魔の叫び声。
真赤な血糊の着いた刃が、さらにまた、血
に飢えたかのようになつた。新たな獲物を求め、目
にもとまらぬ早さで宙を舞った。
「金堀城はもうすぐだ。あと一踏張りで」
大気を切り裂くようなキーンキーンという
鋭い金属音が、絶え間なく、そこここで沸き
起つた。
そして、耳を聳するばかりのワアワアワア
という攻中双方の兵達の喚き声か、宮城全域
を覆いつくした。

*

17°30'310°322°

HL 2,335P

雷鳴 2297

569.11.18

大音声 1328

第一卷。水経注し入穀水条参照。あの高い楼観に素
「あの層楼を目標せ。あの高い楼観に素
白楼曰百尺楼也。金墉城の東北角に聳え立つ
人出て見えるのは、金墉城の東北角に聳え立つ
ような趣きである。なかで一際拔
下から見上げると、まるで雲が湧き起っているかの
飛閣（かけはし）が高く低く建ち並んでいて、
金墉城内のいたるところに、幾層もの楼や
の末に敢えなく開かれ、金墉城の城門さえ、
さらけだした。金墉城の城門さえ、
前に、素交陽傘の軍はギリギリ押さへつづ
うだうだ。斬れ、斬り殺せ。田心姫兄妹の猛攻撃の
だが、意美志留。田心姫兄妹の猛攻撃の
敲きのめす者はおらんのか。ひるむな。そ
追いつ返し、押し戻せ。えいえい、彼奴等を
闇雲に兵達に向って叫んでいた。
素交陽傘は、雷鳴のような大音声で、ただ
すさのまのみにと

切り付け 592
 斬り伏す 593
 2,336
 いたえ 叱咤 992
 石斧 石斧 2310
 2238
 2328 19
 2333 44
 2329 125
 560, 11, 19
 2333
 18

鳴が居るに違いない
 うむ。憎き大王め。ようし、我こそ目に
 物見せてくれようぞ
 義憤に満ちた群集は、刀・槍・石斧等々を手
 に手に、凄いに勢いで金堀城・城内へ突入し
 てゆき、押し合い、突きあい、我勝に先を争
 つて小高い丘の頂を目差した。
 山頂は、黒山の兵庫で溢れかえり、敵も味方
 も分らないほどとなった。
 いかし、この期に及んでも、素交鳴會は声
 を荒げて兵共を叱咤していった。
 斬れ。斬り伏せろ。この城を死地と
 て戦え。そうよ、力の限り戦って死んでゆくか
 よ。男ならば美事に死花を咲かせてみよ
 猛り狂った素交鳴會は、切羽詰った土壇場
 を抑えてもなお、降伏しようという気など全
 く念頭になく、ただただ、
 切り交えて死ね
 と怒鳴りつづけた。

多勢に無勢 1312° 2,337°

散兵 931° 散乱した兵

「あ、なのは、素戔鳴尊の配下の兵達だ。兵卒共は髪を逆立て、やみくもに鉾や剣を振り回し、もはや半狂乱状態となっていた。」「降伏する者は容赦なく切るぞ。死ぬ。死ぬ。」「うわずった素戔鳴尊の声か、背後に響き渡った。」「エヤーーッ。」「ウオーーッ。」「敵の包囲網の中をさまよう素戔鳴尊の散兵達は、もう統率されていらない錯乱した一群と化してまわっていた。」「狂気の兵達は、盲滅法に武器を振り上げ、切りかかって、いつては、多勢に無勢で返り討ちにあって、敢えなく傷つき、死んでいった。」「こうして、敵と味方を合せた戦死者の数は、見る間に想像を絶するものとなった。」「うめき声があちこちに聞え、屍が城内に満ちた。」「いかにも、目を覆うばかりの酸鼻を極めた。」

⑤電 運 時
⑥電 運 時

ゆきつね

更怯了

IL 2385^P

毎々水にて卑屈な
様子をする

2,338^P

魏文選

ちゆう主つ
誅殺 元 1442⁴

⑦ 2344P

この頁より
5所更正

55
71

め
た
戦
い
~~か~~
続
い
て
い
っ
た
。

たか、
やかたつ
いに、
男王素交鳴尊は捕え

られ、
戦いは
終わった。

尚
魏志倭人伝には、この戦闘について、

更に男王を立てゝも、國中服せず。更々

相誅殺し、當時千餘人を殺す

と記す水ていふ


 田
 三
 方
 中
 三
 三

《更に相誅殺したというこの時の争乱は、

男王素文^{すぶん}鳴^{なり}尊^{みこと}からの王位^{おうい}剝^{はく}奪^{だつ}戦^{せん}であり、

てきみかたあ
いっ
ふたん
せんい
た

敵味方合わせて、実に千餘人の戦死者を出

すほどの
九十九
金十
（一
金宇
宙）
を揉
るか
す

一大内乱たつたのであろう。

と推察する

すさのまのサシと
その水トーでも
~~格闘の末~~
雁字搦に搦め捕

うれた素文は、
平然と

ていって悪水た様子もなく、
こう嘯くのた

7. 友

一戦いは時の薄よし

米

うそ
嘘

胸がすく 2156
 快挙 1657 P カンセン 498 P
 敢然 348 P おもいきり 2,339 P - 1/2

快挙は、
 倭国中を教
 狂させた

田心姫の勝利に沸く

田心姫が敢然と

胸のすくような

1186
 2156
 快挙 胸のすくよう

くら 狂おしい 654
560 11.256
2348
11行
目を輝かせた
2348
11行
老若 2355
1682
男世

2.339^P - 2/2

「勝ったぞ。勝ったぞ。田心姫様の大勝利
だ」
「さすが日御子の娘御。やかて名を継いで
日御子となるお方よし」
「かしぐれにいても、あんなに幼いのに
軍を率いて戦い、あんなに素多鳴軍に
打ち勝って、おーまいになった。何と不思議な
霊力をお持ちなのだろう」
「嬉しーい。いやないか。もうビクビクし
ながら暮らさなくてもよいのだ」
「田心姫様が、本当に勝ちになったのね。
よかったわ」
「後国中の老若男世の誰もが、口々に、その戦
勝を我が事として喜び合った。」
「そして人々は、早くも、
もうすぐ、日御子の御世が来るんだ」
「いつ、日御子はお生小になるのでしょ
うね」
「目を輝やかせた。」
「倭国全体が、狂おしいばかりの歡喜の渦の
中にあつた。」

毛 獄舎。と囚められた罪人

獄囚・素戔鳴尊

髪のをと抜く
紀上113"3行

紀小78"79"80"
記(世)52P

紀小448"ほ(2)1"ゆに6人
"80"下85行 52P
52P

2,340P

天兒屋命は、この時宇佐に居る
紀上116行5 紀小80

(12)

その後、諸の神は、素戔鳴尊をきびしく責め、懲罰として下^ミに結^{ムス}った髪のをほとき^キその毛を掴^{つか}んで引き抜いた。お前のやった事がどんなに残酷なものであ^あったか、自分自身で痛みを感じ^{かん}て十二分に思^{おも}い知^しるが良^よいし。そして神々は、素戔鳴尊に千座置戸^{チサヅキド}（抜具^{はくぐ}を差し出す為の台）の解除^{はう}（賠償^{ばいしょう}）を科^かし、手の爪^{つめ}を吉爪^{よきづめ}棄物^{しぶつ}と、足の爪^{つめ}を凶爪^{あしきづめ}棄物^{しぶつ}としてはぎとつた。（神代紀第七段本文参照）
意美志留^{オモシロ}（後の天兒屋命）が、その解除の太^お諄^{のり}辞^と（嚴肅^{げんじゆ}なのりと）を唱^{とな}えた。
手足の爪^{つめ}は、切^きった後もその人の体の一部^{いちぶ}分^{ぶん}であり、その爪^{つめ}を焼^やくとか刻^きむとかして危害^{がい}を加^くえれば、爪^{つめ}の元の所有者^{しよしやうしや}を死^いに至^{いた}らせ、または病^{やまい}に陥^{おち}らせる^{こと}と考^{かん}えられていたのだ^だった。（「日本書紀」上）日本古典文学大系

岩波書店、一一六頁、注五、古事記、新潮社、五二頁、注四、五参照

H30(2018)6.10(日) ~ 6.11(4回)

IF

33 牢 2351P

紀下500P

4年1月15日に大赦

新嘗 168P
③ 2422P

2,341

あづきなし 無道(紀下88P)
むどう 2155P

ごくあへ 極悪 1713P
非道 1875P

さらにまた、後文からみて
人諸の神は、極悪非道だった素戔嗚尊の願
の二つの點を、焼燬を当てるとか刃物で削り
取るとかして消し去り、貴人として
の資格をすっかり剥奪してしまったのだらう。
とであらうと推察される。
一かーなから、素戔嗚尊がどんなに粗暴で
あったとしても、殺すのは忍びなかった。月
読尊にとって同母弟であり、田心姫にとっ
ては叔父に当るわけである。あまり酷い
何分にも
刑罰に処すのは、憚らぬのだった。
こうしてたわけ、素戔嗚尊は獄中の身とな
った。
素戔嗚尊は、最初の冬至の日、次の新
嘗祭、田心姫が王位についた後に祖先神達から
知していただく為の大嘗祭の時まで、牢の内に
留め置かれたのだであらう、と思われる。
(後述)

田心姫こそ正しく倭国の女王である、と正式に認め

とわんつ
小村えんえし

約束

大乱闘の場となつた邪馬台国の都は、戦い
が終つた時、見る影もなく崩れ荒れ果ててし

まつていたが、――かし、いま都は、ふつ
ふつと沸き返るばかりの熱気に包まれてい

都人の顔には喜びがあり、行き交う人々の
足取りには活気があつた。そして都中に再建の

槌音が響き、やがて日ならずして、――光
輝く巖かな都城が、全く昔日のままに蘇つ

た。都はまさしく、春の真只中にあつた。

芳しい花の都。その都の羅城門東脇のこ
もりと盛り上つたあの群山は桃の花で埋まり

大略小路の道端は可憐な花々で縁どられていた。

空には、春の雲が、幾筋も棚引いていて
阿蘇の峯々の向こう、神風の伊邪国（宇佐国）

の方へ、流れていようであつた。（万巻一

八一。同二一六二と三。重仁紀二十五年条

天照命 8210
花弁 1810
緑 1947
2309 1/2

2342

改訂

いささわけ紀上 362 ひとあ 1877 元暦1202 欽明紀 2,343^P

記(星)169^P

感無量 607^P 400^P 560,12,50^P 土まえる 1354^P 万-49.95^P 紀上 270^P

参照

ああ神風よ。この邪馬台国の香りを運ぶ

清々しい風よし

伊邪国の防衛を中臣烏賊津連に任せ

戦後処理の為、なおも邪馬台国に留まる月読

尊は、思わぬ嘆いた。

月読尊は、感無量の思いに堪えず

て、こう口遊んだ。

邪馬台は、国のまほうば(陸地の高くな

って、いる所を良として賞める語)たたな

馬台しうるはし(古事記、新潮日本古典

集成、一六九頁参照)

本来なら、邪馬台国の王都において、全

倭国を統治すべき筈の月読尊にとつて、

へこの邪馬台国に居るということさえもが

ひととお感概深く思えるのだった。

なお、先に述べたとおり、仲哀天皇

の長男月読尊(去来抄別尊)は、父の

崩御後、例の高塚(初代神功皇后の身代りの塚)から

生まれ、第二代目の仲哀天皇として大王の

→ H4.2.21(金) 翌日
→ S69/2.7(土)

ついで P
道S1-14/13才 鏡文53P
えの備る 13/2P
2,345P

うら

改行

改行

改行 16行

もと通りに良く治まっていたのは、皆、月読
の叔父上のお蔭でございます。皇太子月読尊を見上げ
て、田心姫の面差しには、まだあどけなさ
も残っていた。だが、その登んだ目には
何かを思いつめた。ような、井ツと、た真剣さ
かあった。田心姫は、月読尊の両手をとると、
さらにこう言った。是非とも叔父上に倭国全土の
大王になつて、その突然の言葉に驚き、十三
歳になつたばかりの姫の顔をまじまじと見つ
めた。
「かしやあつて、月読尊は大きく頭を振
する文言を選ひながらこう答えた。
「いえいえ田心姫。倭国が遂に定まつたの
は、何と、つても姫君御自身に天との徳が備
わつて、いるからでございます。倭国中の人々は
田心姫を慕ひ、田心姫の為に戦つたのです。
田心姫が立つて、倭国の女王になるのを、
人々は待ち望んで、いと申せましよう。

大層な働きをなされた
たいそう はたら

天の道理 小林 27/7
こと

天命 弘 1554P

紀下 155P 173P
紀上 362P 聊 104P

即位 紀上 363P
改行

尊公 小林 319P 1323P
560.12.8 2,346P
改行

こと

私が大王になるなどということは、到底、天の道理に適っているとは思えません

田心姫は月読尊の言葉を遮って言った。

太伯の血を正統に受け継いでおり、そ

て天命により倭国の王となるべき御方は、叔父

上、去來紗別（伊邪子別）の君より他に誰もお

りません。言う迄もなく聊詠あって、私の祖

母、および母が皇后として攝政うてきたので、

た。しかし、その皇后が亡くなった今、皇太

子の位にある尊公こそ、いま一度即位されるべきであって

当然といえはあまりにも当然のことです。

そのうえ倭国の者たちは、東国で御活

躍しておいでになる月読尊を尊敬して慕

っております。貴方様が倭国の大王

になられることを待ち促しています。

二人の押し問答は続いていった。

だが月読尊は、決して譲らずだった。

「きつぱりと言った。」

田心姫の優い心根をまことに嬉しく思

それは

718 紀上362P

こと

御心 2409¹ 2.347^P

さと 悟 897¹ うさず 領 203¹ 大日 86¹ 紀上 86¹ そう 小林 宗子 302¹

天つ手改行

二と

込んだ

います。しかーながら、田心姫が何とおっし
やろうとも、倭国中の者達は、日御子の再来
をこそ望んでゐるのです。
日御子の宗女である田心姫が、日の神曰大
日靈貴として、光華明彩しく六合の内に照
り徹する時、倭国は富み栄えると申せましよう。
田心姫よ。倭国の女王として立つて下さいし
そういわれて、田心姫は面映ゆそうに頬を
赤らめた。
ここに、月読尊の意志がもはや変わらぬの
なり。父とを悟った田心姫は言つた。
「叔父上の御心は何と大きく、優しさに
あふれてゐるのでしよう。それほどまでに仰
るのですもの。——私・田心は母の後を継
いで、倭国の女王となることにいたしましたよ
う。でも、——一つだけ、御約束願ひとう
存しますし」
月読尊は、
へはて、約束とは一体何なのだろうかと
と怪しみ、思わず身を屈めて、姫の面を覗き
込んだ。

二と

秋9月15日
562.12.9

269年-100才
249年-80才
20 20

1421年
就任

4988

吉野の開闢100年

2339¹⁸ - 1/2
2348¹⁸ - 1/2

51-71¹⁸
↓

田心姫は、微笑みながら言った。

「この秋に、あの母の塚の天石窟を出て、

母の生れ替りとして、皇座の位に就き、百年齢を受

け継ぐこととなるわけですが、――その時、

私の年は丁度八十歳でそうです。私、その

襲名の儀式の時から数えて二十年間だけなら

女王として天座の事を治めましよう。けれ

ども、私が百歳になった時には、叔父上に、

我が倭国の大王となっていたきたりので

す。

瞳は晴れやかに

こう言う田心姫の目は輝いていた。

田心姫は、さらに続けて言った。

「月読の叔父様は、いま東の国に拘奴国

と戦っておられます。でも、いつの日にか叔

父君はその拘奴国を向け平げておーまいにな

るでしょう。叔父上はそんなにも強い

のですもの、早く東の国を討ちかめて平定

したただきたいもので。鎮

ね。私が百歳になるのと、叔父様が拘奴国

を平げるのと、どちらが早いかしら。

「それ、国々、叔父様が大王になって、私が東国

2,348^p - 3/2

の2342^p 昔日、過日、和

ら仰せられたら、
の緊迫した日々を、
懐かしく思い起しながら
・田ハ姫は「過日のあの口伊邪国ハ（宇佐国）
よ、
国、
の、
伊邪国ハ（宇佐国）
へ行けばよいの
そうだから、
叔父様が大王になつて、
私が東

(*)

2349P
改行
天つき
改行

ここに、史記「人呂不韋列伝」を見る、
「夫百歳の後、子とする所の者、王と為ら

は、云々」

とある。

「百歳」とは高貴な人の死を忌んでいう言

葉であり、中国では古来「人生百年をもつて

寿命」と言われてきたという。「史記」春秋戦

国篇、中国古典選、朝日新聞社、二九三頁参照

「隣国をお、隣国を討ち平げ、領土を奪う戦闘」の

是非について、この物語では論述しない。

「ただ、世界の歴史を振り返ってみると、

「隣国を併呑することが連続と打ち続いてきた」とい

「いつてもあながち誤りではあるまい」

日本の歴史も、同様であったと見られる。

「太伯の後と自称する倭人達は、日本列島最

西端に足掛りを得、こゝより後、徐々に徐々に隣

国を侵食し、ついに九州、中国、四国、近

畿・中部・関東・北陸・東北地方へと領有地を

広げていったように解さる。

「歴史とはある意味で非情なものだ」とい

えよう。

(*)

史記春秋戦国
285P

③ 3,355^P

1日 早く ④ 2353^P 20斤
2,350^P

1885
後5分7
次④ 2351^P

1472^P
2329^P

560, 12, 10
560^P

「^{かぬこく}拘奴国を、早く^{はやく}平定してほし^い」
と、いう可憐な乙女の健気を願^{ねが}いに、
「^{かぬこく}この島国に、倭国と拘奴国とが今のま^{いま}ま
いっまでも両立してお小るとは考えられない
いつの日にか、どちらかが潰え去る^こことにな^い
ろう。それならば、勝たなければならな^い
月読尊は、目許に笑みを宿しながら、
強く、田心姫にこう答えた。
「よく分りました。東の国、^{かぬこく}拘奴国はな
かなか、^い意気盛んであり、大いに手強い剛敵
ではあります。しかし、この月読、^か力の限り
戦って、一日も早く勝利を手中に収めるよう
に努めましよう。そして、皇后が百歳になら
れたあかつきには、御言葉通り私が大王とな
り、日御子田心姫には東国伊弉国（宇佐国）
へおいで願うことにいたしましよう。
^{かぬこく}拘奴国を平げるのが早いか、
田心姫が百歳に
なれるのが早いか、私にとって、
大變興味深く

大カマ988¹ 2324¹ 1929¹ 2263¹ 2351¹ 2355¹ 2353¹ 2354¹ 2355¹ 2356¹ 2357¹ 2358¹ 2359¹ 2360¹ 2361¹ 2362¹ 2363¹ 2364¹ 2365¹ 2366¹ 2367¹ 2368¹ 2369¹ 2370¹ 2371¹ 2372¹ 2373¹ 2374¹ 2375¹ 2376¹ 2377¹ 2378¹ 2379¹ 2380¹ 2381¹ 2382¹ 2383¹ 2384¹ 2385¹ 2386¹ 2387¹ 2388¹ 2389¹ 2390¹ 2391¹ 2392¹ 2393¹ 2394¹ 2395¹ 2396¹ 2397¹ 2398¹ 2399¹ 2400¹

吉大社 西本泰、学生社、九九頁参照。第二十六
 昭和五十二年五月二十日発行

紀下第十段 書第一の下で 田心姫は、茶目ッぽ
 東を交した。この時、何とまあ田心姫は、
 く、にッニリ、微笑んでこう言われた。
 紗別、の君、貴方様が所帯せる十握剣を私に授
 小ませぬか。十握剣を索い取ると、田心姫は、サッ
 と抜き放た、その抜身の剣を、天真名井、天真名井
 と、去来、え、真名井ともいう。の清らかな水
 の中につけて、そっと揺り動かして濯いだ。
 (神代紀上第六段本文、同一書第一参照)
 田心姫は、徐にその切先に手を当てて、一度だ
 け撫でつけ、次いで、唇を寄せると、
 ふっと一息、息を吹きかけた。
 なお、一度手をもって撫でつけ、一度息を
 吹きつける儀式を、一撫一息という。(一任

均等、桂男、2353¹ 9斤

章

〔節折の儀〕の項、一撫一息し参照

参考迄に述べると、天真名井に

て、伊勢神宮には次のような伝承がある。

昔、度会神主の遠祖が高天原の天真名

井の水を高千穂の峯に持ちくだり、次に丹

波の（豊受大御神の）天真名井に移し、

さらに、豊受大御神の伊勢遷祭とともに伊勢外宮南境

の高倉山西北端にあたる藤岡山の裾の忍徳

井に移したと伝えられている。（第9表へ豊受大神参照）

それ、この忍徳井は、もっぱら神供

の御料として用いる泉とされていゝという。

（「伊勢神宮」松井勝彦、学生社、二六頁

参照）

この伝承と日本書紀の記述とを重

ね合わせる、

天真名井、天彦名井、去來え眞名井、忍

井（忍徳耳尊の井、恐らく応神天皇の井と

いう意味なのだろう）

となるように思われる。

*

④2500^P-3/2

④3355^P申佐(降) 2,354^P

紀 270年即位 紀上362^P

→ 560.12.14 ④2498^P

④2351^P ④2353^P 165^P

と 解 釈 一 て み た い。

月読尊の胸に頬を押し当てながら、十三歳の乙女は夢見るように言った。
尚、この誓約は丁度二十年後(二六九年)に現実のこととなる。
百歳となったときに、攝政としてその位を返上し、替って皇太子去來紗別尊(リ譽田別尊)が、約九ヶ月(約十月十日)後に大王(応神天皇)の地位に即かれたのだった。
もともと、その時、東の国、狗奴国は未だ倭国に平定されていなかった。
く、応神天皇は東国、伊邪国(宇佐国)に都を置いて政治を執り行なうことにされた。
い、ほう田心姫は、攝政の位を辞退したものの、相変わらず邪馬台国の都に在って、
天照大神として人々に敬まわれ続けたのであろう。
つまり、応神天皇の御代当時(応神朝末の数年間を除く)①倭国王の都は、東国(宇佐国)にあり、
②天照大神の宮は、邪馬台国(肥後国)にあった。(第9表(内宮の変遷の歴史)参照)

大半の御代当時

⑤ 2500^P - 1/2 ~ 3/2

2,355^P

宮の名「飛鳥」門脇横=21^P 皇室大百科
皇室大百科 402^P 192^P
↓

そして、この変則的な政治の仕方は、東域平定の後、世にまでも引き継がれていったようだが、

すなわち、

● 応神天皇 (複数名襲名された内の最後の元)

● 神天皇は、和国、輕鳥の明の宮を都とされたのだろう。元神記参照

● 仁徳天皇 (難波の高津宮)

● 履中天皇 (大和の磐余稚櫻宮)

● 反正天皇 (河内の丹比の柴倉離宮)

● 允恭天皇 (大和高市郡の遠飛鳥宮。この遠

飛鳥宮と、顯宗天皇の河内の近飛鳥宮とは、

邪馬台国へ肥後国からの遠近によって名付

けられたのではなからうか)

● 安康天皇 (大和の石上の穴穂宮)

● 雄略天皇 (大和の泊瀬の朝倉宮)

と続く各大王は皆、邪馬台国の東(今の畿内)の地

に都を置き、政治を行なわれたように見受けられる。(第一表参照)

● もつともその間、邪馬台国は見捨てられて

いたわけでは決まらなかった。

● 天照大神は、
華明彩しく、
六合の内に照り徹した。

前頁14行
左あって

天つき
改行

改行

こと

田心姫・瑞津姫・市杵嶋姫……

と、天照大神の御世はつづいていった。

九州の両方の地に王朝が並立し、

日本の歴史は紆余曲折の道を歩むことになる

と想到される（第1表参照）
こう（経緯の）詳細につ

いては追々述べてゆきたいや

*

さて、月読尊は、そうそういつまで

も、邪馬台国の春を樂しんでは居小なか

った。

東国（伊邪国）（宇佐国）の中臣からは、

平穩無事の便が居いているとはいえ、

いつ何時情勢が急変するかも知れない、と気

掛りだっただ。

田心姫との別れを惜しみつつ、月読尊は

兵を率いて都を離れた。後、

月読尊の統率ぶりには、流石、堂々として

H30(2018) 6.11(月) ~ 6.12(4回) ^{カサリ} 帰路 367P (ニ) 下

2.357P

6月21日 夏空坂 田越え 39P
1870 524 和歌山 39P

外輪山の近くの西の方から、
里垣りは見えない。 (改行)

いる。隊列を整えた兵達は、武者ぶり
も肩ましく、白川の北岸沿いに、一路東国を
目指した。行く道の真正面には、高千穂の峯(高
い千もの山々の連なる峯。阿蘇の外輪山)
が、天高く聳え立っていた。田心姫を慕い、集ま
陽気な者達もまた、そうそう国へ帰って、苗代作
りかからなければなるまいし
と、有明の海の潮が引くように、三三五五、
足どりも軽やかに、都を去っていった。
人々は、この世に再び春が巡ってきたこと
を喜び合い、心から楽しそうに様子で、父や
母や妻や子の待つそれの我家へと、
を急いだ。

*

母の許で

の孤立丘「横山」の

夏も末頃のある日、トトスーブリ

に邪馬台国の都の土を踏んだ中臣伊香刀美

急ぎ立てようにして、田心姫は都城西北隅

頂に横たわる二上の塚を訪れた。

生きたまま陵の域に埋め立てられた者達を

覆っているのだらうか。山陵の処々に、うず

たかく積み上げられた青草の山があった。

御陰の上に引きわたされた標縄から下る

四手が、ひらひらと靡いており、一層か

な霊妙な気が漂ってくる。

その径百餘歩の塚は、傍に立つ田心姫の心

く掻き乱すに、おかなかつた。

「お母さま」

田心姫は、母の許に立ち寄り、再び帰

り得たことを喜び、小さな胸をときめかせて

話しかけた。

「とはいえ、悲しくて辛いことの多かつたあ

かんけい 処女 488P
たき 靡く 1666P
2,358P
御陰 36P
お人 11P
元 112P
元 271P
元 272P
元 273P
元 274P
元 275P
元 276P
元 277P
元 278P
元 279P
元 280P
元 281P
元 282P
元 283P
元 284P
元 285P
元 286P
元 287P
元 288P
元 289P
元 290P
元 291P
元 292P
元 293P
元 294P
元 295P
元 296P
元 297P
元 298P
元 299P
元 300P
元 301P
元 302P
元 303P
元 304P
元 305P
元 306P
元 307P
元 308P
元 309P
元 310P
元 311P
元 312P
元 313P
元 314P
元 315P
元 316P
元 317P
元 318P
元 319P
元 320P
元 321P
元 322P
元 323P
元 324P
元 325P
元 326P
元 327P
元 328P
元 329P
元 330P
元 331P
元 332P
元 333P
元 334P
元 335P
元 336P
元 337P
元 338P
元 339P
元 340P
元 341P
元 342P
元 343P
元 344P
元 345P
元 346P
元 347P
元 348P
元 349P
元 350P
元 351P
元 352P
元 353P
元 354P
元 355P
元 356P
元 357P
元 358P
元 359P
元 360P
元 361P
元 362P
元 363P
元 364P
元 365P
元 366P
元 367P
元 368P
元 369P
元 370P
元 371P
元 372P
元 373P
元 374P
元 375P
元 376P
元 377P
元 378P
元 379P
元 380P
元 381P
元 382P
元 383P
元 384P
元 385P
元 386P
元 387P
元 388P
元 389P
元 390P
元 391P
元 392P
元 393P
元 394P
元 395P
元 396P
元 397P
元 398P
元 399P
元 400P
元 401P
元 402P
元 403P
元 404P
元 405P
元 406P
元 407P
元 408P
元 409P
元 410P
元 411P
元 412P
元 413P
元 414P
元 415P
元 416P
元 417P
元 418P
元 419P
元 420P
元 421P
元 422P
元 423P
元 424P
元 425P
元 426P
元 427P
元 428P
元 429P
元 430P
元 431P
元 432P
元 433P
元 434P
元 435P
元 436P
元 437P
元 438P
元 439P
元 440P
元 441P
元 442P
元 443P
元 444P
元 445P
元 446P
元 447P
元 448P
元 449P
元 450P
元 451P
元 452P
元 453P
元 454P
元 455P
元 456P
元 457P
元 458P
元 459P
元 460P
元 461P
元 462P
元 463P
元 464P
元 465P
元 466P
元 467P
元 468P
元 469P
元 470P
元 471P
元 472P
元 473P
元 474P
元 475P
元 476P
元 477P
元 478P
元 479P
元 480P
元 481P
元 482P
元 483P
元 484P
元 485P
元 486P
元 487P
元 488P
元 489P
元 490P
元 491P
元 492P
元 493P
元 494P
元 495P
元 496P
元 497P
元 498P
元 499P
元 500P
元 501P
元 502P
元 503P
元 504P
元 505P
元 506P
元 507P
元 508P
元 509P
元 510P
元 511P
元 512P
元 513P
元 514P
元 515P
元 516P
元 517P
元 518P
元 519P
元 520P
元 521P
元 522P
元 523P
元 524P
元 525P
元 526P
元 527P
元 528P
元 529P
元 530P
元 531P
元 532P
元 533P
元 534P
元 535P
元 536P
元 537P
元 538P
元 539P
元 540P
元 541P
元 542P
元 543P
元 544P
元 545P
元 546P
元 547P
元 548P
元 549P
元 550P
元 551P
元 552P
元 553P
元 554P
元 555P
元 556P
元 557P
元 558P
元 559P
元 560P
元 561P
元 562P
元 563P
元 564P
元 565P
元 566P
元 567P
元 568P
元 569P
元 570P
元 571P
元 572P
元 573P
元 574P
元 575P
元 576P
元 577P
元 578P
元 579P
元 580P
元 581P
元 582P
元 583P
元 584P
元 585P
元 586P
元 587P
元 588P
元 589P
元 590P
元 591P
元 592P
元 593P
元 594P
元 595P
元 596P
元 597P
元 598P
元 599P
元 600P
元 601P
元 602P
元 603P
元 604P
元 605P
元 606P
元 607P
元 608P
元 609P
元 610P
元 611P
元 612P
元 613P
元 614P
元 615P
元 616P
元 617P
元 618P
元 619P
元 620P
元 621P
元 622P
元 623P
元 624P
元 625P
元 626P
元 627P
元 628P
元 629P
元 630P
元 631P
元 632P
元 633P
元 634P
元 635P
元 636P
元 637P
元 638P
元 639P
元 640P
元 641P
元 642P
元 643P
元 644P
元 645P
元 646P
元 647P
元 648P
元 649P
元 650P
元 651P
元 652P
元 653P
元 654P
元 655P
元 656P
元 657P
元 658P
元 659P
元 660P
元 661P
元 662P
元 663P
元 664P
元 665P
元 666P
元 667P
元 668P
元 669P
元 670P
元 671P
元 672P
元 673P
元 674P
元 675P
元 676P
元 677P
元 678P
元 679P
元 680P
元 681P
元 682P
元 683P
元 684P
元 685P
元 686P
元 687P
元 688P
元 689P
元 690P
元 691P
元 692P
元 693P
元 694P
元 695P
元 696P
元 697P
元 698P
元 699P
元 700P
元 701P
元 702P
元 703P
元 704P
元 705P
元 706P
元 707P
元 708P
元 709P
元 710P
元 711P
元 712P
元 713P
元 714P
元 715P
元 716P
元 717P
元 718P
元 719P
元 720P
元 721P
元 722P
元 723P
元 724P
元 725P
元 726P
元 727P
元 728P
元 729P
元 730P
元 731P
元 732P
元 733P
元 734P
元 735P
元 736P
元 737P
元 738P
元 739P
元 740P
元 741P
元 742P
元 743P
元 744P
元 745P
元 746P
元 747P
元 748P
元 749P
元 750P
元 751P
元 752P
元 753P
元 754P
元 755P
元 756P
元 757P
元 758P
元 759P
元 760P
元 761P
元 762P
元 763P
元 764P
元 765P
元 766P
元 767P
元 768P
元 769P
元 770P
元 771P
元 772P
元 773P
元 774P
元 775P
元 776P
元 777P
元 778P
元 779P
元 780P
元 781P
元 782P
元 783P
元 784P
元 785P
元 786P
元 787P
元 788P
元 789P
元 790P
元 791P
元 792P
元 793P
元 794P
元 795P
元 796P
元 797P
元 798P
元 799P
元 800P
元 801P
元 802P
元 803P
元 804P
元 805P
元 806P
元 807P
元 808P
元 809P
元 810P
元 811P
元 812P
元 813P
元 814P
元 815P
元 816P
元 817P
元 818P
元 819P
元 820P
元 821P
元 822P
元 823P
元 824P
元 825P
元 826P
元 827P
元 828P
元 829P
元 830P
元 831P
元 832P
元 833P
元 834P
元 835P
元 836P
元 837P
元 838P
元 839P
元 840P
元 841P
元 842P
元 843P
元 844P
元 845P
元 846P
元 847P
元 848P
元 849P
元 850P
元 851P
元 852P
元 853P
元 854P
元 855P
元 856P
元 857P
元 858P
元 859P
元 860P
元 861P
元 862P
元 863P
元 864P
元 865P
元 866P
元 867P
元 868P
元 869P
元 870P
元 871P
元 872P
元 873P
元 874P
元 875P
元 876P
元 877P
元 878P
元 879P
元 880P
元 881P
元 882P
元 883P
元 884P
元 885P
元 886P
元 887P
元 888P
元 889P
元 890P
元 891P
元 892P
元 893P
元 894P
元 895P
元 896P
元 897P
元 898P
元 899P
元 900P
元 901P
元 902P
元 903P
元 904P
元 905P
元 906P
元 907P
元 908P
元 909P
元 910P
元 911P
元 912P
元 913P
元 914P
元 915P
元 916P
元 917P
元 918P
元 919P
元 920P
元 921P
元 922P
元 923P
元 924P
元 925P
元 926P
元 927P
元 928P
元 929P
元 930P
元 931P
元 932P
元 933P
元 934P
元 935P
元 936P
元 937P
元 938P
元 939P
元 940P
元 941P
元 942P
元 943P
元 944P
元 945P
元 946P
元 947P
元 948P
元 949P
元 950P
元 951P
元 952P
元 953P
元 954P
元 955P
元 956P
元 957P
元 958P
元 959P
元 960P
元 961P
元 962P
元 963P
元 964P
元 965P
元 966P
元 967P
元 968P
元 969P
元 970P
元 971P
元 972P
元 973P
元 974P
元 975P
元 976P
元 977P
元 978P
元 979P
元 980P
元 981P
元 982P
元 983P
元 984P
元 985P
元 986P
元 987P
元 988P
元 989P
元 990P
元 991P
元 992P
元 993P
元 994P
元 995P
元 996P
元 997P
元 998P
元 999P
元 1000P

2,358 P 2/2

1099 1374
おせい 1099
おせい 1374

560.12.17

の当時 (どうい) の 駭然 (そうぜん) とした状況 (じょうきよう)

め、肩を震わせ、涙が頬を伝い、留めなく落ちていった。田八姫は、母の塚に向かつて、心の丈を熱心に一途に語り続けた。

一方、そんな田八姫の様子を気遣い遠慮したのであろうか。中臣は、少し離れた山陰で姫に背を向け、そっと佇んでいた。あるいは中臣の胸の内にも、懐かしい愛しい妻の思い出が去来

して、いたのかも知れない。蕭然として日御子の眠る高塚を仰ぎ見るその目から、何か、白く光るものか、つつと滲り落ちていった。

(頭部)

*

收 11 元 P
寢入子 1720 P
寢顔 1721

34

コクヨ ケ-20 20×20

あな 1251P
2.361P

感涙 509P
「なほ」
てい。

おほみかみ 大御神 282P

しづめつけ 1019P

出来な、不思議な熱い涙がこぼれ落ちていっ

中臣は、締め付けられるような厳かな思

いに胸を震わせながら、祈った。

「大御神よ。大御神が見はるかして給う限り

のこの国土の繁栄と統一とお護り下さい。

また、この大御代の永遠をお守り下さい。」

（「伊勢神宮」桜井勝彦進、学生社、一三七

頁へ神祇官、中臣の上代祝詞参照）

中臣は、はるかにはるかに遠い我が国家の

未来を思い、感涙に噎せながら祈りつづけ

た。

そして、田心姫が甘く切ない一時を過した

この径百余歩の場は、——これ以降の日本

の歴史を、悉に見守り続けてゆくことになる

米

なるほど、

「魏志倭人伝中に明記されていゝといえ

三世紀中葉頃の我国に、径百余歩の卑彌呼の

84-109 2192 早立
紀上280

2.362 1/2

合志 地8635
合志の町 2190 末 2191 2192 早立
5696

塚が本当に作られたのかどうかし
というところに關しては、―――現在
考古学上の確証が全く無い。
まー、何処に作られたのかなど分る筈もない
とある。
―かしく先に述べたように、この物語では、
「菊池郡合志原の孤立丘」に横山Bの山頂に
卑彌呼（日御子）の徑百余歩の塚が作ら
た
と仮定した。 (第三十四章へ徑百余歩の塚
の項において既述)
丁度、二つの「椀」を伏せ並べたか
ようである
そして、二上の山の南斜面一帯は現
在下段々
の蜜柑畑となつてゐる。
初夏のころには白い花桶が咲き乱
れ、
五、三、七、七、九、秋ともなはば
黄金色に輝く
非時の香の木の実が枝もたわわに
実り、冬に

なつて霜が降りてさえもその葉は映え榮えて
（万十ハ一四一）ハ——四季折々に、
誠に美しい光景である。
■横山の口ニ上の山頂の山頂のうち、宮城寄
り（東南）の方の頂上には、
が有り、
季節季節に衣した種々のものが供えられてい
る。
いつ訪れても
また時として、父と幼い娘の親子連である
うか、山の上の小さな祠にお参りし、手
を合せている姿など見かけることもある。
——この山が、土地の人々に敬われ慕われ
ていることが察せられる。
■恐らく、昔から、先祖
代々、細々とながらも近隣地域の人達に深く
親しまれ、崇拝されてきたのであろう。
そして日御子は、さらにさらに、ずつと遙
かな未来の日本国を築いて、じつと見守り

1かた
仕方がない 947
ほころばさる 2034P

大蛇
夢見る
目覚め

なから
2,363P

2359P 無邪気 2150P

いっ
た
面持で、
にっ
こりと
顔
をほ
ころ
ばせ
な

●
田
心
姫
は、
嬉
し
く
て
嬉
し
く
て
仕
方
か
な
い
と

「私、お母様の夢を見ていたのよ」
「その容には、充分に寝足りた子の、あの満」

足しきった表情があった。
「その容には、充分に寝足りた子の、あの満」

「なから起き上がった。」
「その容には、充分に寝足りた子の、あの満」

と大きく伸をした。
「その容には、充分に寝足りた子の、あの満」

杯の無邪気な様子で、
「その容には、充分に寝足りた子の、あの満」

いた田心姫は、やがて、
「その容には、充分に寝足りた子の、あの満」

母の暖い懷に抱かれたまま、
「その容には、充分に寝足りた子の、あの満」

眠りつつづけて
「その容には、充分に寝足りた子の、あの満」

大きな欠伸をした
「その容には、充分に寝足りた子の、あの満」

「と、こころを察さる」

「と、こころを察さる」

H30(2018)6,11(月)~6,12(4回)

H31(2019)1.26(日)~26.1.4 H7.6.20 おた
1.26(3回)H10.10.17 湯やか小鉢582'

令和元(2019)7.30(日)~7.31(3回)

令和2(2020)2.10(日)~2.12(4回)

令和2(2020)10.25(日)~10.27(4回)

よそえ P 2368 寄り添う 2292 夢の中の 2047
おぼろえ P 321 夢 321
2.364 P 2368 夢 321
「夢か」 P 2360 P
母の心と心暖まるまで
元氣張りまたぬって

10/27 10/25

*

から言った。
お母様は田心のタルを褒めて下さった。
大変だったのに、よくやりまいたぬって。
夢の中のことをあれこれ仔細に話して、
道を下っていった。
朧な太陽は、もうかなり西の方へ傾いてい
て、あたりにはほのぼのとした湯や
かな光を放っていた。
うるわしくも父と娘の二人は、寄り添い、
あはれ嬉嬉として戯小ながら、山の麓へと
降りてゆくのだった。
で待つ手輿の方

(こ)